

St. Luke's International University Repository

Cooperation between nurses in the radiology unit and inpatient units when providing psychological support to patients receiving interventional radiology. Problems and solutions.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 正子, 浅井, 望美, 今井, 祐子, 金子, 真理子, 関口, 和子, 河浪, 仁美, 野口, 純子, 古舘, 美幸, 内田, 真美, 村田, 洋章, 小松, 絵里, 高橋, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/474

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報告

IVRを受ける患者の心理的サポートのための 看護師間の連携に関する調査 —看護師間の連携上の問題と工夫—

黒田 正子¹⁾ 高橋 恵子²⁾ 浅井 望美³⁾
 今井 祐子⁴⁾ 金子真理子⁵⁾ 関口 和子⁶⁾
 河浪 仁美⁷⁾ 野口 純子⁷⁾ 古舘 美幸⁷⁾
 内田 真美¹⁾ 村田 洋章¹⁾ 小松 絵里¹⁾

Cooperation between Nurses in the Radiology Unit and Inpatient Units when Providing Psychological Support to Patients Receiving Interventional Radiology: Problems and Solutions

Masako KURODA, R.N.¹⁾ Keiko TAKAHASHI, R.N., M.N.²⁾ Nozomi ASAI, R.N.³⁾
 Yuuko IMAI, R.N.⁴⁾ Mariko KANEKO, R.N.DNSc⁵⁾ Kazuko SEKIGUCHI R.N.⁶⁾
 Hitomi KAWANAMI, R.N.⁷⁾ Junko NOGUCHI, R.N.⁷⁾ Miyuki FURUDATE, R.N.⁷⁾
 Mami UCHIDA, R.N.¹⁾ Hiroaki MURATA, R.N.¹⁾ Michie KOMATSU, R.N.¹⁾

〔Abstract〕

As the use of interventional radiology (IVR) increases, the necessity of nurses to understand this treatment also increases. This survey study describes the cooperation issues between radiology unit's nurses and inpatient unit's nurses who care for the same patients receiving IVR. The focus was about the present status of problems and solutions when psychological supporting of the patient who receives IVR. Of the 190 questionnaires mailed to 190 nurses, physicians and radiology technicians participating in the Interventional Radiology Study Group, 144 (75.8%) were returned. Content analyses was used to classify and analyze the responses. A major theme was noted: "Inadequate reporting about the physical and psychological needs of the patient about to receive IVR occurred between the radiology unit and the inpatient unit". The specific contents of the problem were: "inadequate reporting of information about the patient", and "and inadequate reporting about the patient care protocol governing effective preparation of the patient for IVR." However, a number of solutions were also documented from the content analysis. It was found that the Radiology nurses: "constructed of a system to support the patient", "engaged in increased communication between the staff", "strengthened nurse knowledge and understanding about IVR", and "provided patients with an orientation to the IVR environment and protocol before the IVR treatment". Cooperating so that continuous quality nursing care can be performed will be important. It is recommended that nurses

1) 聖路加国際病院 看護師 看護部 St. Luke's International Hospital, Nurse, Department of Nursing

2) 聖路加看護大学 精神看護学 St. Luke's College of Nursing, Psychiatric and Mental Health Nursing

3) 国立がんセンター中央病院 看護師 看護部 National Cancer Center, Nurse, Department of Nursing

4) 静岡県立静岡がんセンター 看護師 看護部 Shizuoka Cancer Center, Nurse, Department of Nursing

5) 東京女子医科大学看護学部 成人看護学 Tokyo Women's Medical University, Adult Nursing

6) 東京医科歯科大学医学部付属病院 看護師 看護部 Tokyo Medical and Dental University Hospital Faculty of Medicine Nurse Department of Nursing

7) 東京医科大学病院 看護師 Tokyo Medical University Hospital, Nurse, Department of Nursing

hold information exchange and the study meetings about the IVR daily practice so that patients can undergo radiographic examinations and radiographic medical treatments in comfort.

〔Key words〕 interventional radiology, psychological support, nursing in radiology,
〔キーワード〕 IVR, 心理的サポート, 放射線科看護,
cooperation
連携

〔抄 録〕

本研究の目的は、IVRを受ける患者の心理的サポートを行う上での看護師間の連携に焦点を置き、そこで生じる問題点と工夫についての現状を明らかにするものである。研究方法は、IVR看護研究会に参加した看護師とその他の医療従事者に質問紙調査を行い、回答された内容を、類似した内容ごとに分類し分析した。その結果、IVRを受ける患者の心理的サポートを行う上での看護師間の連携上の問題には、「患者情報の伝達不足」と「業務上の伝達不足」といった『連携部門（病棟）と放射線科間の申し送り内容の不十分さ』が明らかになった。また、実際に行われている看護師間の連携上の工夫については、システムを構築することや、スタッフ間のコミュニケーションを図ること、IVRに関する知識をしっかりと身につけることが明らかになり、患者情報の伝達を円滑にし、伝達不足や間違いをなくし、統一化を図ろうとしていることがうかがえた。連携部門と放射線科部門の看護者間がよりよい連携をとり、適切な情報交換を行うことこそが、患者が安心して検査や治療を受けるために最も重要な心理的サポートとなることが示唆された。

I. はじめに

放射線診療において、放射線科看護師が携わる治療手段には放射線治療と interventional radiology（以下、IVR：画像診断下治療）の2つに分けられる。IVRとは、画像診断技術を疾患の治療に応用する手技のことをいい、血管造影技術を応用した経皮的カテーテル操作による血管病変の治療が現在IVRの代表的なものである。IVRは画像診断の技術が近年急速に発展したことや、次々に新しい機材などが技術開発され新しい治療方法への可能性と期待に注目されている領域である。

IVRに携わる看護師の専門的知識とは、放射線透視による放射線被曝の人体への影響と被爆防護のための知識、IVRの対象となる患者の疾患についての治療方法と合併症や予測される副作用、IVR施行中に使用される造影剤などの薬品に関する知識と副作用の出現についての症状の観察と判断と対応、また次々に改良される新しい機材や画像診断技術の知識、IVRを受ける患者の身体的・心理的サポートの方法などがあげられる¹⁾。特に、放射線科看護師の多くが、心理的サポートの手法を知り得たいと希望し、心理的侵襲を伴うIVRを受ける患者に接し、さまざまな問題に遭遇し苦慮している²⁾。IVRの検査室は、特殊な環境からもたらされる患者の精神的な苦痛を軽減するため、工夫した環境作りが必要となる。そのため、治療を担当する医師、看護師、診療放射線技師、病棟・外来での医師、看護師などの良好なスタッフ間の連携が患者の心理的サポートを行う上でと

ても重要となってくる。

そこで、本研究は、IVRを受ける患者の心理的サポートを行う上での連携上の問題点と工夫を、看護師間の連携に焦点を当てて、現状を明らかにし、看護師間の連携上の問題解決に必要な改善方法の示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

2000～2002年度の期間に首都圏内で開かれたIVR看護研究会¹⁾に参加した看護師およびその他の医療従事者の計190名。

2. 調査期間

2003年11月～12月。

3. 調査方法

郵送にて研究協力の依頼用紙と無記名の自由回答式のアンケート用紙を送付し、郵送回収を行った。調査内容は「IVRを受ける患者が安心して検査・治療を受けられるよう実践している看護師間の連携上の問題の有無と内容」と「IVRを受ける患者が安心して検査・治療を受けられるよう実践している看護師間の連携の工夫内容」についての2つの質問項目であった。

4. 分析方法

放射線科に勤務する看護師と研究協力者間で、自由回答された内容から類似した問題内容、工夫内容ごとに分類し分析した。

5. 倫理的配慮

研究協力者へ依頼文書を質問紙とともに同封し、質問の回答は自由意志で拒否の自由を保証し、アンケートの返信が得られた場合は研究協力で同意したものと解釈した。また、回答された内容は、個人が特定できないこと、プライバシーにも十分配慮した。

III. 結果

1. 対象者の概要

質問紙を190部郵送し、144名（回収率75.8%）から回答を得た。対象者は、女性117名（81.7%）、男性27名で、平均年齢37.2歳（内訳：20代が39名、30代が60名、40代が25名、50代が14名、60歳以上が6名）であった。職種は、看護師114名、准看護師4名、医師7名、放射線技師14名、その他5名であった。各職種の経験年数は、1年未満が3名、1～5年が38名、5～10年が34名、10年以上が69名であった。所属部門については、看護職の情報のみであったが、病棟44名、外来37名、検査室27名、救急3名、心臓カテーテル室2名、臨床試験1名、ICU1名であり、放射線の看護経験者は、73名（50.7%）であった。

2. 看護師間の連携上の問題

IVR を受ける患者の心理的サポート上の看護師間の連携に問題を感じたことが「ある」と回答したものは103名（71%）であった。その内訳は看護師114名中86名、准看護師4名中3名、医師7名中4名、放射線技師14名中8名、その他3名中2名であった。

図1に示すように、主な看護師間の連携上の問題については、【患者情報に関する伝達不足】と、【業務上の伝達不足】といった『連携部門と放射線科間の申し送り内容の不十分さ』が挙げられた。また、それらの問題の背景として、【看護師の知識・理解の不足】と【病院のシ

ステムの問題】の2つの項目に分類された。

まず、主な看護師間の連携上の問題の【患者情報に関する伝達不足】に関する具体的な内容は、「身体面の申し送りが主になり、精神的な部分での申し送りがない」「患者の訴えや検査に対する不安や思いの申し送りが少ない」などといった《患者の精神的情報の不足》であった。2つ目に「造影剤アレルギーなど、患者から言われてわかったりすることがある」「腰痛や四肢の拘縮について申し送りでは伝えられていなかった」といった《患者の身体的情報の不足》も挙げられた。3つ目に「オリエンテーションが不十分で、検査室での説明に時間を取られる」「説明を理解できないまま検査を受けている患者さんがいる」などの《IVRの説明に関する患者理解の確認不足》が挙げられた。また、【業務上の伝達不足】に関する具体的な内容としては、「医師からの指示を病棟看護師が知らなかった」「検査の開始時間が病棟に伝わっていない」といった内容が挙げられた。

また、問題となった背景である【看護師の知識・理解の不足】に関する具体的な内容は、「連携部門（病棟）の看護師が検査内容を理解できていない」「連携部門（病棟）看護師のIVRの知識・理解が低く申し送りのポイントがずれている」といった《病棟看護師の知識・理解不足の内容》と「重症患者の場合、放射線科看護師が病態や観察事項を理解して介助についているのか不安」「放射線科看護師に重症患者のライン管理を託すのが不安」といった《放射線科看護師の（重症患者の病態生理・管理に関する）知識・理解不足》が挙げられた。さらに、【病院のシステムの問題】に関する内容は「申し送りと電子カルテの情報と異なる時がある」「電子カルテの情報が更新されていない」といった《電子カルテの問題》と、「申し送り時間の余裕がない、申し送りの場所が確保できない」といった《申し送りの問題（時間・場所のなさ）》が挙げられた。

3. 看護師間の連携上の工夫

表1に示すように、IVR を受ける患者が安心して検査・治療を受けられるよう実践している看護師間の連携上の工夫内容については、『システムの構築』『スタッフ

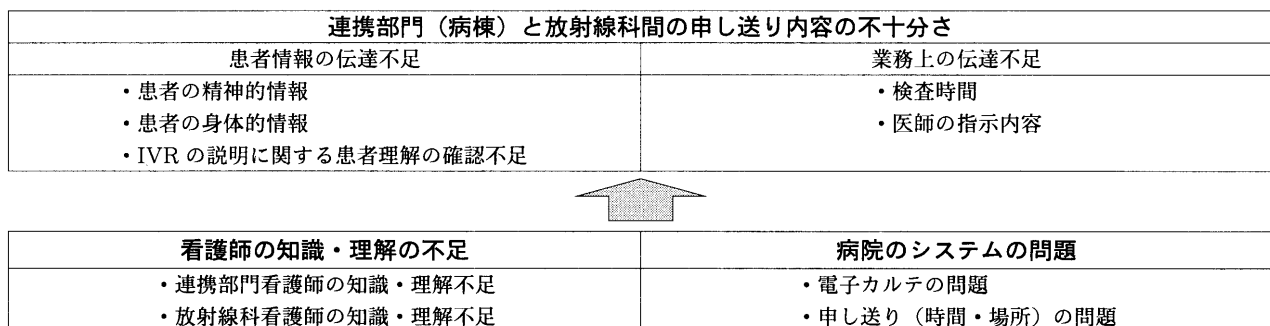


図1 看護師間の連携で生じる問題とその背景

表1 実践している看護師間の連携の工夫内容

システムの構築	「申し送り内容の復唱」 「ON-CALL による呼び出し」 「電話による申し送り」 「放射線科検査室別の検査内容・検査数等のボードへの記入・明示」 「処置版への情報の記入」 「連携部門と放射線科間の意見交換の場の設定」 「マニュアル・手順等の変更時の文書による通知」 「クリティカルパス・マニュアル・チェックリスト・情報シートやチャート・問診表等の作成・活用」 「ネームバンドや二人で復唱する事による患者認識・フルネームの声出し確認」
スタッフ間のコミュニケーション	「カテール室の看護師間のカンファレンス」 「申し送り時は、送る・送られるだけでなく、質問しあう」 「自分が関わった患者のことを話題にする」 「必要時は患者のキャラクター等の情報も伝達する」 「検査につき、その場を離れられない場合等は、他の看護師に声を掛け合い、助け合う」 「患者が緊張・不安等を抱いているときは、『ある』ということだけでなく、具体的内容を送る」 「検査室内の他職種の人達とも、手順の確認をし、ディスカッションする」 「分からないことは、直接電話して情報を取ったり、質問したり、知識を得る」
看護師の検査に対する知識と理解の強化	「検査・治療自体及び患者の病態・治癒過程等を勉強する」 「オリエンテーション内容の共通認識を持つ」 「病棟看護師の血管造影室検査・治療の見学」
患者とのコミュニケーション	「検査・治療前に患者に挨拶・自己紹介する」 「笑顔で接し、明るい対応をする」 「声かけを頻回にする。何気ない事でも聴いたり話し掛ける」 「検査・治療前にオリエンテーションや術前訪問等の形で、一度は直接顔をあわせる」 「検査の説明をきちんと伝える」
術前オリエンテーション	「処置前の術前訪問を取り入れる」 「病棟ナースの血管造影室検査・治療の見学を取り入れる」 「検査・治療前にオリエンテーションや術前訪問等の形で、一度は直接顔をあわせる」 「検査・治療前に患者に挨拶・自己紹介を行う」

間のコミュニケーション』『看護師の検査に対する知識と理解の強化』『術前オリエンテーション』の5つの項目に分類された。

『システムの構築』の具体的方法には、「申し送り内容の復唱」「ON-CALL による呼び出し」「電話による申し送り」「放射線科検査室別の検査内容・検査数等のボードへの記入・明示」「処置版への情報の記入」「連携部門と放射線科間の意見交換の場の設定」「マニュアル・手順等の変更時の文書による通知」「クリティカルパス・マニュアル・チェックリスト・情報シートやチャート・問診表等の作成・活用」「ネームバンドや2人で復唱することによる患者認識・フルネームの声出し確認」の8つが挙げられた。

【スタッフ間のコミュニケーション】の具体的な工夫内容は「カテール室の看護師間のカンファレンス」「申し送り時は、送る・送られるだけでなく、質問しあう」「自分が関わった患者のことを話題にする」「必要時は患者のキャラクター等の情報も伝達する」「検査につき、その場を離れられない場合等は、他の看護師に声を掛け合い、助け合う」「患者が緊張・不安等を抱いているときは、『ある』ということだけでなく、具体的内容を送る」「検査室内の他職種の人たちとも、手順の確

認をし、ディスカッションする」「分からないことは、直接電話して情報を取ったり、質問したり、知識を得る」の8つが挙げられた。

【看護師の検査に対する知識と理解の強化】の具体的な内容・方法については「検査・治療自体及び患者の病態・治癒過程等を勉強する」「オリエンテーション内容の共通認識を持つ」「病棟看護師の血管造影室検査・治療の見学」の3点が挙げられた。

【患者とのコミュニケーション】に関する具体的な工夫内容には、「検査・治療前に患者に挨拶・自己紹介する」「笑顔で接し、明るい対応をする」「声かけを頻回にする。何気ないことでも聴いたり話し掛ける」「検査・治療前にオリエンテーションや術前訪問等の形で、一度は直接顔をあわせる」「検査の説明をきちんと伝える」の5つが挙げられた。

【術前オリエンテーション】に関する具体的な工夫内容には「処置前の術前訪問を取り入れる」「病棟ナースの血管造影室検査・治療の見学を取り入れる」「検査・治療前にオリエンテーションや術前訪問等の形で、一度は直接顔をあわせる」「検査・治療前に患者に挨拶・自己紹介を行う」の4つが挙げられた。

VI. 考 察

1. IVR を受ける患者の心理的サポートを行う上での看護師間の連携上の問題

IVR を受ける患者が安心して検査・治療を受けられるよう実践している看護師間の連携上の問題には、「患者情報の伝達不足」と「業務上の伝達不足」といった『連携部門（病棟）－放射線科間の申し送り内容の不十分さ』が明らかになった。その背景には、『看護師の知識・理解の不足』と、「電子カルテの問題」「申し送りの問題」といった『病院のシステムの問題』があることが明らかになった。これらの根底には連携部門（病棟）－放射線科間の日頃のコミュニケーション不足が要因として考えられる。病棟看護師、放射線科看護師がお互いの役割やお互いの専門領域の知識・理解を十分把握できておらず、連携部門（病棟）側は患者を託すことへの不安を生じ、放射線科側は必要な情報が得られないことでの不満や不安を抱き、その感情がお互いのコミュニケーションをさらに悪化させていると考えられる。そのため、お互いの役割について理解し合うミーティングの場や勉強会を院内に設け、お互いの役割を認識し、日頃のコミュニケーションが円滑に行われる機会を作っていくことが重要である。

また、連携部門（病棟）の看護師がIVRの専門知識を十分理解していないことで、IVRに重要な情報の伝達不足が生じる。そのため、IVRの専門知識を学ぶ勉強会を院内に設ける、また、院外の研究会などに参加し、IVRに関する専門知識・理解を深める機会を作ることが必要である。

また、電子カルテや病院システム上の問題提起もあり、各自が常に問題意識をもちIVRを受ける患者が安心して検査・治療を受けられるような実践に努めていこうとする姿勢を大切にしていくことが重要だと思われる。

2. IVR を受ける患者の心理的サポートを行う上での看護師間の連携に関する工夫

IVR を受ける患者の心理的サポートを行う上での看護師間の連携に関する工夫については、システムを構築することにより、患者情報の伝達を円滑にし、伝達不足・間違いをなくし、統一化を図ろうとしていることがうかがえた。システムを構築していく中で、患者の精神的な問題に直接的に働きかけるためのものは挙げられなかった。IVR 前の術前訪問の取り入れは、直接患者と接することで、身体的な部分だけでなく、精神的な面に関する情報収集を事前に把握でき、患者の心理的サポートを行う上で重要だと思われる。また、スタッフ間のコミュニケーションについては、声を掛け合い、話し合い、患者に対して共通認識を持つことができることも重要である。さ

らに、看護師がしっかりと専門知識を持ち、看護師間で適切な情報提供をすることこそが、患者が安心してよりリラックスして検査・治療を受けられるために最も必要なことである。しかし、まだ、IVR に直接携わる看護職も、また看護研究についても少ない領域である¹⁾。また、黒田は²⁾、IVR を受けている患者へのメンタルケアの学習の場が少なく、独自で勉強をしている看護師が多い現状を示している。そのため、各病院で取り組んでいるさまざまな工夫などを情報交換できる交流の場を院内外に増やしていくことが今後の課題となってくる。

VII. 結 論

- 1) IVR を受ける患者の心理的サポートを行う上で、7割の医療従事者が看護師間の連携に問題を感じていた。
- 2) IVR を受ける患者が安心して検査・治療を受けられるよう実践している看護師間の連携上の問題には、「患者情報の伝達不足」と「業務上の伝達不足」といった『連携部門（病棟）－放射線科間の申し送り内容の不十分さ』が明らかになった。その背景には、『看護師の知識・理解の不足』と、「電子カルテの問題」「申し送りの問題」といった『病院のシステム』の問題があることが明らかになった。
- 3) 『連携部門（病棟）－放射線科の申し送り内容の不十分さ』についての看護師間の連携の工夫にシステムの構築に力を入れることで患者情報の伝達を円滑にし、伝達不足・間違いをなくし、統一化を図ろうとしていた。
- 4) 患者が安心して検査や治療を受けられるように患者をケアする看護師間と日ごろの実践方法の情報交換や勉強会を行いながら、継続的な看護が行えるよう連携していくことが重要である。

引用文献

- 1) 黒田正子. [特集] 放射線看護／いまとこれから IVR における看護の役割とその専門性を高める取り組み. *Quality Nurseing*. 7(12), 2001, 6-10.
- 2) 黒田正子, 高橋恵子. IVR を受ける患者のメンタルケアに携わる看護職が抱える問題に関する調査. 第34回日本看護学会論文集. 2003, 183-184.

参考文献

- 1) 立行政法人放射線医学総合研究所監修. ナースのための放射線医療. 朝倉書店, 東京, 2002.
- 2) 黒田正子. 放射線検査・治療とナースの役割. *看護学雑誌*. 63(3), 1999, 222-229.